

岩船大豆情報 No.1

平成28年4月12日
村上農業普及指導センター
J A に い が た 岩 船

1 平成28年産大豆「高品質・多収栽培」のポイント

- ・作付ほ場の団地化(周囲水遮断)
- ・排水対策の徹底(周囲明きよ、弾丸暗きよの実施)
- ・砕土率(直径2cm以下の土塊割合)を70%以上とする
ていねいな耕うん作業
- ・種子消毒、播種後除草剤散布の徹底
- ・中耕・培土の2回実施

目標収量 270kg/10a

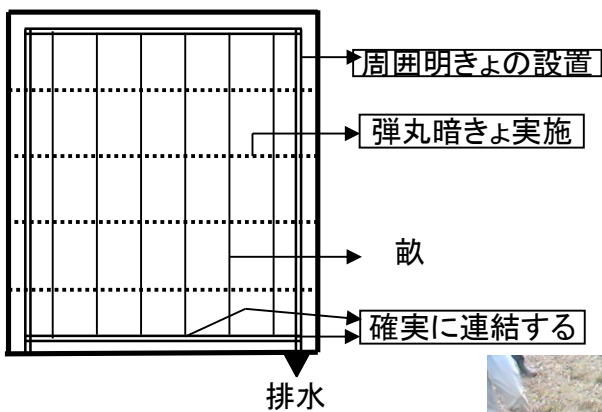
目標品質 2等級以上60%

【参考】村上地域における大豆の検査状況 (「岩船地方における稲作概況」より)

年度・品種名		検査数量 (個/30kg)	等級比率(%)				
			1等	2等	3等	合格	規格外
H27	エンレイ	9,329	4.5	25.5	33.5	36.3	0.2
	あやこがね	1,390	0.0	0.0	15.9	84.1	0.0
	里のほほえみ	3,189	16.0	11.3	22.8	49.4	0.6
	合計	13,908	6.7	19.7	29.3	44.1	0.3
H26(全品種)		13,345	0.1	16.0	55.7	27.6	0.7
H25(全品種)		12,226	0.0	1.7	29.6	61.6	7.0
H24(全品種)		16,141	2.6	8.1	24.8	63.7	0.8
H23(全品種)		9,437	7.4	28.3	53.1	10.0	1.2
H22(全品種)		12,026	0	12.8	56.8	27.3	3.1

2 排水対策の徹底

排水対策のイメージ図



排水対策のポイント

- ① ほ場周囲に明きよを掘り、排水口に確実につなげる(溝幅20~30cm、深さ30~40cm)。
- ② 弾丸暗きよは深さ30~45cm、間隔は透水性の悪いほ場では2~3mおきに施工し、透水性が良いほ場では間隔を広げる。

周囲明きよ及び弾丸暗きよの施工例

- ・深さ 40cm
- ・幅 30cm



3 種子消毒

- ①種子消毒により、ネキリムシ類、タネバエ、苗立枯病、紫斑病などを適切に防除しましょう。
- ②クルーザーMAXXを使用する場合は、キヒゲンR-2フロアブルの処理は不要です。

薬剤名	処理方法	種子1kgに対する塗沫量	本剤の使用回数	対象病害虫
クルーザーMAXX	塗沫処理	8 ml	1回	茎疫病、紫斑病、苗立枯病(ピシウム菌)、リゾクトニア根腐、黒根腐病、アブラムシ類、フタスジヒメハムシ、ネキリムシ類、ハト、キジバト、タネバエ、

4 施肥

- ①大豆は多量の窒素を必要とし、根粒からの供給が大半を占めます。
根粒菌は酸性土壌を嫌うため、石灰質肥料は必ず散布しましょう。
- ②基肥分量は、10a当たり窒素1.5～2.5kg、リン酸6～8kg、カリ6～8kgを目安としましょう。

	資材名	施用量(kg/10a)	成分率(%) N-P ₂ O-K ₂ O	成分量(kg/10a)			
				N	P ₂ O ₅	K ₂ O	アルカリ分
酸度矯正 土壌改良	粒状苦土炭カル(M-10)	130	アルカリ 55	—	—	—	71.5
	ケイカル(粒状)	160	アルカリ 45	—	—	—	72.0
	70粒状石灰	100	アルカリ 70	—	—	—	70.0
基肥	ニュー大豆800	20	8-30-20	1.6	6.0	4.0	—
	有機入り大豆配合2号	20	8-12-14	1.6	2.4	2.8	—

5 耕耘、播種

- ①排水対策を早め実施し、ほ場をよく乾かしましょう。
- ②排水不良、重粘土質ほ場は、できる限りほ場が乾いた条件の良い日に耕うんを行いましょう。
- ③耕うん・砕土・整地の作業は、連続作業で行う(耕うん後に降雨があるとほ場が乾きにくくなります)。
- ④作業速度を落とし、耕うんピッチを小さくして作業しましょう(1回目の耕耘で細かくすることが効果的です)。
- ⑤は種時期と栽植密度は下表を参考に適切に行ってください。
- ⑥「里のほほえみ」は種子が大きいので大粒用のは種目皿等を使用しましょう。
- ⑦播種後に晴天が続くと予想される場合は、播種深をやや深めにしてください。

播種時期と播種密度のめやす

播種時期	5月末～6月10日	6月11～20日
エンレイ	9～10粒/m ²	13～18粒/m ²
あやこがね	13～15粒/m ²	16～19粒/m ²
里のほほえみ	13～15粒/m ² (6月に入っては種しましょう)	

6 雑草対策

- ①耕起前雑草が多いと、出芽・苗立ちの低下を招くときがあります。あらかじめ枯殺しておきましょう。
- ②耕起前に茎葉処理剤で雑草を防除するときは、周辺の水稲に飛散しないよう留意しましょう。
- ③播種後の除草剤は除草効果を安定させるため、播種直後、土壌が乾燥する前に散布しましょう。

農薬は、農薬使用者が責任を持って使用しましょう。
農薬を使用する際は最新の登録状況やラベルを良く確認し使用しましょう。
農薬は、平成28年4月 6日現在での登録状況により掲載しています。

